

最後の大検挙 浦上四番崩れと長崎各地での弾圧

パリ外国宣教会による秘かな布教活動

信徒発見直後から、長崎奉行所の監視の目を潜り抜け、浦上村をはじめ五島列島等長崎各地のキリシタン集落の指導者が大浦天主堂へ訪れました。また、宣教師達も各集落を密かに訪れて布教活動を行ないました。特に多数の潜伏キリシタンがいた浦上村には、聖マリア堂、聖ヨゼフ堂、サンタ・クララ堂、サン・フランシスコ・ザベリオ堂の四つの秘密教会堂が設けられました。

浦上四番崩れ

1867 年、浦上村のキリシタンが、檀那寺である聖徳寺の僧侶の手を経ずに死者を葬ることが相次ぎました。このことがきっかけとなり、最終的に地元の潜伏キリシタンが庄屋に対して自らの信仰を表明する事態となりました。キリシタンの存在が表面化すると、密偵による調査がなされ、その情報は江戸に報告されました。

1867 年 6 月、第 125 代長崎奉行 徳永石見守昌親は、170 人の部下を秘密教会堂に突入させ、指導的立場にあった高木仙右衛門をはじめとした 68 人を捕縛しました。その後も逮捕者は増え、投獄された者には厳しい拷問が加えられました。この事件に対しプロシア領事をはじめ各国領事が奉行所に抗議しました。フランス公使が徳川幕府最後の将軍徳川慶喜と直接交渉にあたった結果、キリシタンたちは厳しい監視の下に置かれ続けたとはいえ、牢から出ることができました。

大規模な弾圧

厳しく扱われたのは、浦上村のキリシタンだけではありませんでした。幕末から明治時代（1868-1912）の初期にかけて、外海や五島列島等各地のキリシタン共同体は弾圧を受け、捕らえられたものには激しい拷問が加えられました（五島での弾圧は五島崩れと呼ばれています）。江戸幕府が明治政府に変わった後も、徹底的なキリスト教の禁止は変わりませんでした。年号が明治となった最初の年の 1868 年 11 月、五島列島の久高島で、特にひどい事件が起こりました。「牢屋の窄」と呼ばれる 20 平米ほどの空間に約 200 人のキリシタンが 8 か月にわたって密集状態で閉じ込められ、激しい拷問を受けました。幽閉中、このうち 42 人が亡くなりました。このような非道な弾圧について知ったイギリス公使は、1870 年実態調査のために五島を訪れました。

「旅」 一村流罪

1868 年、新しく九州鎮撫総督に着任した沢宣嘉は、部下井上馨とともに長崎に到着しました。彼らは浦上キリシタンの取調べを行い、報告書を作成しました。この報告をもとに行われた御前会議により、浦上キリシタン全村総流罪の処分が下されました。長崎に派遣された太政官参議の木戸孝允は、中心人物 114 名を萩・津和野・福山藩に流配しました。この浦上村のキリシタンへの処分は、西洋諸国に衝撃を与え、やがて深刻な外交問題へと発展しました。

イギリスやフランス、アメリカの激しい抗議にも関わらず、1870 年 1 月には男子 700 人とその家族までもが流配されました。あわせて 3,394 名の浦上キリシタンが 20 藩に配流されました。流配されたキリシタンたちは各地で改宗を迫られ、拷問されたり重労働を強いられたりしました。明治政府に対する各国からの繰り返しの帰還要求や待遇改善要求は無視されました。この約 5 年に及ぶ苦難は「旅」として知られています。この苦難の中で

も多くの信徒が信仰を守りぬきました。流配先で 613 人が亡くなり、浦上に戻ることができたのは 2,911 人だけでした。

図 1

幕末頃の浦上村山里略図

図 2

(左) 高木仙右衛門肖像
(個人蔵)

(右) 政府の密偵が記録した高木仙右衛門の屋敷内の聖ヨゼフ堂平面図
(長崎歴史文化博物館)

ある夜、第 126 代長崎奉行 河津伊豆守祐邦がは、入牢中の高木仙右衛門を立山役所（現在長崎歴史文化博物館が建つ場所にあった）の大広間に呼び出し、改宗するよう説得した。仙右衛門は断固拒否の姿勢を貫いた。

(長崎歴史文化博物館)

図 3

楠原の切支丹牢

(三井楽教会資料館)

1868 年のキリシタン弾圧では、五島列島の福江島にあるこの家に 33 人のキリシタンが押し込められた。

図 4

1868 と 1869 年にキリシタンが流配された場所

最初の数字は 1868 年、二番目の数字は 1869 年の流配人数を指す。()内の数字は死亡者数。